

ヒューマンインタフェースは、人間と機械の関係について、常に人間の視点から論ずる学問分野である。VR学会も、人間にとってvirtualな(essenceの)世界の仕組みとその設計を追求する人々の集まりであり、アプローチの仕方はやや異なるかも知れないが、人間中心の考え方は共通である。ヒューマンインタフェース学会が誕生した暁には、この技術の未来について、互いに補完する立場で、多様な観点から論議していかれることを期待したい。

## ◆ IEEE International Workshop on RO-MAN'98 - 報告 1

今井 倫太

(ATR 知能映像通信研究所)

羽尻公一郎

(ATR 人間情報通信研究所)

(News letter Vol.3, No.10)

人間とロボットのコミュニケーションをテーマにした国際会議RO-MAN'98の第7回大会が、9月30日から10月2日まで香川県高松市商工会議所で開かれた。基本的には、ロボットを中心とした会議であるが、人と機械のインタラクションを扱った多種多様な研究の発表が数多く見られた。全てのセッションを聞くことができなかったため完全な報告とはいかないが、この報告が、活気ある会議の雰囲気伝えることができれば幸いである。以下、セッションごとに会議の内容を報告する。

### ○言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの統合

ピッツバーグ大学のコーンらは、表情の微妙な変化を見つけ出す手法について研究していた。表情の微妙な変化をとりだし、単純に分類された従来の表情モデルでは欠落する微妙な心理的变化を将来的には読みとろうとしているらしい。また、ATRからは、「ロボットは恋できるか?」といった研究の発表があった。本当に恋するロボットを作ったのかと思ったが、実際には、認知的不協和をベースにした自律機構の枠組の提案であった。言語コミュニケーションにおける言葉の意味は身体の状態(心臓の鼓動など)に依存する側面があり、身体からの束縛が意味を変えてしまう場合があることをモデル化し提案していた。

### ○VRセッション

NTTの平岩らが、サイバースコープと題してテレイグジスタンス用の自作デバイスを紹介していた。モノレールカメラや、移動カメラ、カメラ制御のための車椅子を紹介していた。ISDNを通した、具体的なサービスを目指しているようである。

### ○美的認知 (Cognitive Aesthetics)

認知における美的感覚や芸術的感覚についてのセッションとして、5件の発表があった。エジンバラ大学のG.Ritche教授は、ユーモアの計算モデルに関する発表を行った。主としてダジャレ、なぞなぞなどの自動生成に関する研究であった。大分大学の藤田教授は、感情計算モデルや常識などの知識ベースを用いた小説の内容の読解の認知過程の計算モデルを提案した。東工大の往住助教授らは、感情計算モデルから美的計算モデルへの移行に伴う諸課題と、フィクション小説の理解のための意味ネットワークに関する発表を行った。最後に宮崎大学の田中教授らが、ランダムモデルによる心的状態の測定に関する発表を行った。これらは従来の知識処理から感情/感性処理へと続く高次認知のパラダイムシフトの行方として、美的処理/美意識処理という分野を開拓しようという野心的なものであり、文学理論やポスト構造主義/ポストモダニズムなどをAIの分野に取り込もうとする、今後の展開が楽しみな先端的/学際的分野である。なお、筆者がセッションの後で往住助教授と話したところ、「エステティック(美的)コンピューティングというキーワードで新たな問題意識を提唱したい。」という野心的な御意見をいただいた。また「要はエステ(美顔)と似たようなものですよ。」とオチャメなことも仰られていた。

## ◆ IEEE International Workshop on RO-MAN'98 - 報告 2

星野 洋

(松下電工(株) ウェル・ラボ)

(News letter Vol.3, No.10)

IEEE RO-MAN'98が9月30日から10月2日の間、香川県高松市で開催された。ロボットと人間とのコミュニケーションに関する国際会議であり、発表内容もロボットの要素技術開発から、ロボットと人間とのインタフェースの設計・構築まで、ロボット全般はもちろんのこと、美的認知、感性工学など「人間寄り」のセッションもあり、非